

## 1900年～1904年

### レーニン 1900年に拘禁(数日間)

#### 1900年 『イスクラ』(『火花』)の発行(1900.12.11～)

1900年にレーニンが創設した最初の全国的なマルクス主義的非合法新聞。革命的マルクス主義者のこの戦闘的機関紙の創刊は、「その当時、党の当面していたもろもろの環の鎖ともろもろの任務の鎖のなかで、基本的な環であり、基本的な任務であった」(スターリン)。

警察の追及が激しくてロシア国内で革命的新聞を発行することが不可能だったので、レーニンはまだシベリアの流刑地にいたあいだに、これを国外で発行する計画をくわしく考えぬいた。一九〇〇年一月に流刑がおわると、レーニンはすぐさま自分の計画の実現にとりかかった。

レーニンの『イスクラ』の第一号は一九〇〇年十二月十一日(二十四日)ライプチヒで発行され、それにつづく諸号はミュンヘンで、一九〇二年四月以降はロンドンで、一九〇三年の春以後はジュネーヴで、発行された。

『イスクラ』編集局には、ヴェ・イ・レーニン、ゲ・ヴェ・プレハーノフ、ユ・オ・マルトフ、ペ・ベ・アクセリロード、ア・エヌ・ポトレソフおよびヴェ・イ・ザスーリッチがはいっていた。編集局の書記には、一九〇一年の春以後、エヌ・カ・クルプスカヤがなった。レーニンは事実上『イスクラ』の編集主筆であり、指導者であった。彼は『イスクラ』紙上に、党建設とプロレタリアートの階級闘争のあらゆる基本問題について論文を書き、国際生活のもっとも重要な諸事件にたいして反応した。

ロシアの幾多の都市(ペテルブルグ、モスクワ、等)に、レーニンの「イスクラ」派に属するロシア社会民主労働党のグループや委員会が創設された。外カフカーズで『イスクラ』の思想をまもりぬいたのは『ブルドゾーラ』(『闘争』)であって、これは、チフリスの社会民主主義組織、そのレーニンの「イスクラ」グループの最初の非合法のグルジア語新聞であった。外カフカーズにおけるレーニンの「イスクラ」組織の創設者であり指導者であったのは、イ・ヴェ・スターリンのほか、ヴェ・ゼ・ケツホヴェリ、ア・ゲ・ツルキツェ、ヴェ・カ・クルナトフスキーであった。

各地の「イスクラ」組織は、レーニンとスターリンとによってそだてあげられた職業革命家たち(エヌ・エ・バウマン、イ・ヴェ・バーブシキン、エス・イ・グセフ、エム・イ・カリーニン、等)の直接の指導のもとに成立し、活動した。

『イスクラ』編集局は、レーニンの提唱により、また彼の直接の参加のもとに、党綱領草案(『イスクラ』第二号に発表)を作成し、ロシア社会民主労働党第二回大会を準備した。この大会は一九〇三年七～八月にひらかれた。この大会の召集されるまでには、ロシアの地方の社会民主主義組織の大多数が「イスクラ」派に合流し、その戦術、綱領、組織計画を承認し、『イスクラ』を自分たちの指導的機関紙とみとめていた。大会は特別決定で党建設のための闘争における『イスクラ』のなみなみならぬ役割を指摘し、これをロ

シア社会民主労働党の中央機関紙と宣言した。

第二回大会ではレーニン、プレハーノフ、マルトフから構成される編集局が確認された。マルトフが党大会の決定に反して編集局にはいることを拒否したので、『イスクラ』第 46～51 号は、レーニンとプレハーノフの編集で発行された。その後プレハーノフは、メンシェヴィズムの立場にうつって、大会によってしりぞけられたメンシェヴィキ派の旧編集局の全員を『イスクラ』編集局に代わるように要求した。レーニンはそれに同意することができなかったため、党中央委員会内で地歩をかため、この陣地からメンシェヴィキの日和見主義者を打つために、1903 年 10 月 19 日(11 月 1 日)に『イスクラ』編集局から脱退した。第 52 号は、プレハーノフ一人の編集で出された。1903 年 11 月 13 日(26 日)、プレハーノフは独断で、大会の意志に違反して、『イスクラ』編集局にその以前のメンシェヴィキ的編集局員たちを補充した。第 52 号以後は、メンシェヴィキは『イスクラ』を自分たちの機関紙にかえてしまった。(「このときから党内では、レーニンのボリシェヴィキ的『イスクラ』を旧『イスクラ』と呼び、メンシェヴィキの日和見主義的『イスクラ』を新『イスクラ』と呼ぶようになった。」『ソ同盟共産党小史』、国民文庫版、第一冊、七七ページ)

第七巻 P583~585

「イスクラ」組織 ——イスクラ派のサークルの一つ。イスクラ派というばあい、それは、あるサークルの一員のことではなく、新聞『イスクラ』に代表されるある特定の傾向の味方のことを意味するにすぎなかった。

第七巻 P585

### 第二回大会召集のための組織委員会(1902. 3~)

はじめ 1902 年 3(4)月のペロストク協議会で選出されたが、協議会の直後にその委員たちは(一人をのぞいて)逮捕されてしまった。一九〇二年十一月にレーニンの提唱による、プスコフにおける社会民主主義諸委員会協議会で新しい組織委員会がつけられた。新しい委員会ではイスクラ派が大多数を占めていた。

レーニンの指導のもとに組織委員会は、党第二回大会の準備のために大きな仕事をはたした。一九〇三年二月にオリョールでひらかれた総会では、党大会召集規程草案が採用された。二月総会の際、組織委員たちは二回各地方委員会をまわってその活動を援助した。組織委員の参加のもとに地方の党組織は大会召集規程草案を討議したが、ついで規程は組織委員会によって確認された。

組織委員会は、採用された規程にしたがって大会参加の権利をもつ地方組織のリストを確認した。組織委員会は、大会にたいして自己の活動にかんする詳しい文書報告を作成した。

第七巻 P585

### ロシア社会民主労働党第二回大会 (1903. 7)

一九〇三年七月十七(三十)日から八月十(二十三)日まで開催された。大会のはじめの一三回の会議はブリュッセルで行われた。ついで、警察の迫害のために、大会の会議はロンドンにうつされた。全部で三七回の会議がひらかれた。大会の議事日程には二〇の問題がのぼっていたが、そのうちでもっとも重要なものは、党綱領、党の組織(ロシア社会民主労働党規約の確認)、中央委員会および党中央機関紙編集局の選挙であった。大会には二六の組織が代表されていた。五一の議決権をもつ計四三名の代議員(八名の代議員は

おのおの二票ずつもっていた) と評議権をもつ一四名の代議員とが出席した。

大会はレーニンの『イスクラ』によって準備された。レーニンは大会準備のために大活躍をした。

レーニンは「イスクラ」組織の活動にかんする報告要綱を作成し、党規約草案や、大会で審議される予定の一連の問題にかんする決議草案や、議事日程や、大会議事規則を作成した。

レーニンは代議員にたいして大きな活動を行った。彼は地方における情勢と組織状態を究明し、大会に提出されていた多くの問題を代議員と協同で審議した。レーニンは、大会代議員の集会の一つで民族問題にかんする概要報告を行った。大会の構成は同質的なものではなかった。大会には『イスクラ』の支持者ばかりでなく、その反対者も、ふらふらの動揺分子も出席していた。レーニンはまえもって代議員たちと知合いになっていたので、すでに大会の開会前に一人一人の代議員の政治的立場を明らかにすることができた。

レーニンは大会ビューローに選出され、綱領委員会、規約委員会、資格審査委員会のような大会の主要な小委員会の構成にくわわった。彼は大会で党規約について報告を行い、議事日程上のほとんどすべての問題について演説した。大会議事録には、一三〇以上のレーニンの演説、評言、応答が記録されている。

ロシア社会民主労働党第二回大会の意義の評価については、『ソ同盟共産党（ボリシェヴィキ）小史』、国民文庫版、第一冊、68～75ページをみよ。 第七巻 P581~582

『ロシア社会民主労働党第二回大会の顛末』——これは、第二回大会後、メンシェヴィキの分裂主義的、組織攪乱的な行動に反対するボリシェヴィキの闘争が激化した時期に書かれた。一九〇四年一月に大会議事録が公けにされるまでは、この『顛末』は、第二回大会の総結果と党の分裂の原因とを明らかにした唯一の文書であった。 第七巻 P582

### 中央委員会の最後通牒（1903. 11. 12）

一九〇三年十一月十二（二十五）日にメンシェヴィキにつきつけたもの。これよりまえ一九〇三年十月二十二日（十一月四日）に、レーニンは中央委員会に手紙をおくり、そのなかでメンシェヴィキにつぎの条件を提示することを提議した。

（一）三名の旧編集局員を編集局員に補充すること、（二）在外連盟の以前の状態を回復すること、（三）党評議会における議決権を一つメンシェヴィキに提供すること。第一回目のこれらの条件は、協調主義者的な中央委員たちの支持をうけなかった。レーニンは、この同じ手紙のなかで、最後通牒の、すなわち中央委員会としてそこまではゆるせるといふメンシェヴィキにたいする実際上の譲歩の、基本的な条項をしめし、それと同時にここではそれを確認するにとどめ、メンシェヴィキには当分知らせないように、中央委員会に提議した。その条項は、（一）四名の旧編集局員を編集局員に補充すること、（二）中央委員会の選択によって二名を中央委員に補充すること、（三）在外連盟の以前の状態を回復すること、（四）党評議会における議決権を一票メンシェヴィキに提供すること。さらにレーニンは、手紙のなかでつぎのように言っている。

「最後通牒をうけいれないときは、徹底的な戦争である。追加条件として、（五）第二回党大会、およびその後における紛争についてのいっさいの裁判ざた、非難攻撃および論議を中止すること。」レーニンのこの提案は（追加条件をのぞいて）十一月十二（二十五）

日付の中央委員会の最後通牒のなかにとりいれられたが、協調主義的な気持をもっていた中央委員たちによっていくぶんやわらげられた。

メンシェヴィキは中央委員会の最後通牒を拒否して、党の多数派にたいする戦争に乗りだした。

中央委員会の最後通牒の評価を、レーニンが著書『一步前進、二歩後退』（本巻、四〇三ページ参照）のなかであたえている。

第七巻 P592-593

#### 中央委員会の構成における異動(1904. 7~9)

一九〇三年七~八月の第二回党大会では、レングニク、クルジジャンノフスキー、ノスコフが中央委員に選出された。同年十月（新暦）には、ゼムリャチカ、クラシン、エッセン、グサロフが中央委員に補充された。同年十一月にはレーニンが中央委員会の構成にくわり、またガリペリンが補充された。一九〇四年七~九月のあいだに、中央委員会の構成に新たな変化が生じた。すなわち、レーニンの支持者であるレングニクとエッセンが逮捕された。調停派のクルジジャンノフスキーとグサロフは辞任した。同じく調停派のクラシン、ノスコフ、ガリペリンは、レーニンの抗議にもかかわらず、不法にも、多数派の支持者であるゼムリャチカを中央委員会の構成からのぞき、三人の調停派——リュピーモフ、カルポフ、ドゥブロヴィンスキーを補充した。それらの異動の結果、調停派が中央委員会内の多数派を成すにいたった。

第七巻 P607

#### 一九〇四年七月の中央委員会の決定(1904. 7)

調停派の中央委員クラシン、ノスコフ、ガリペリンが、一九〇四年七月に中央委員会の名で採択した決定——「七月宣言」と呼ばれている——のこと。この決定は、同年八月二十五日の『イスクラ』第七二号に、『中央委員会の声明』という表題で発表された。この決定のなかで、彼らは、プレハーノフが補充したメンシェヴィキ的『イスクラ』編集局の構成を適法なものともみとめ、メンシェヴィキの日和見主義を擁護した。彼らは、中央委員会にさらに三人の調停主義者——リュピーモフ、カルポフ、ドゥブロヴィンスキーを補充した。調停主義者たちは第三回党大会の召集に反対し、大会召集の煽動を行った中央委員会南部ビューローを解散させた。彼らはまた、レーニンから中央委員会の在外代表の権限をうばい、中央委員会の合議体の許可なしに彼の著作を出版することを禁止した。

「七月宣言」を採択したことは、調停派の中央委員たちが第二回党大会の諸決定を完全に裏ぎったこと、および彼らが公然とメンシェヴィキの側にうつったことを、意味するものであった。

第七巻 P606